

ヴォイス ～森の声～

2号 vol.2-1 2008/05/10

中・高校生☆協同編集による

クリティカル・カルチャー・マガジン



1部：特集

★「行事を
考える」

3p

★「憲法」

9p

Guests

板垣敬子・押立 敏
樹

木又 楽・斉藤知也

菅間正道・中島水樹

早川 誠

2部：「ここに面白い世界がある。」

写真展 1p ☆建築家と数学 18p ☆ツツのツツ 19p ☆西表島 21p

音 23p ☆木が叫ぶ 25p ☆放課後も食堂あいてるよ 26p

なにしょう、なにできる 27p ☆他者と交わる 28p

JPS 写真展



上の写真は JPS 写真展（日本写真家協会）に出した写真です。

この写真は高1の学年ワークで「職人と出会う」というコースで最後に行った豊屋さんで撮った写真です。

まさか、これが入選するとは思ってもみなかった。。

僕は基本的に風景の写真を主に撮っている。最初はケータイのカメラでとっていてこのきれいな景色を誰かに伝えたい。という訳でもなく、ただ自分が、きれいだ、と思った絵を撮っていただけだったと思う。そのうちそのケータイで撮った写真を友達にあげるようになった。そこで、友達の反応がよかったからもあるのか、きれいだなと思った風景を撮って人に見せるようになった。

その時はただ何も考えず綺麗な風景を撮ってみせていただけだった。そのうち「プロで写真を撮っていききたい」と思い、この JPS 写真展に写真を出してみたのだが、結果、入選。

入選したからにはこの道を進んでいこうと思った。だが、このまま何も考えないで撮っているだけではいい写真は撮れないと思い、改めて自分の写真で何を伝えればいいのか。自分は何を写真で伝えたいのかというのを考えた。きれいな風景といってもいろいろあると思う。

力強い風景、流れるような風景、神秘的な風景。

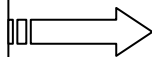
僕が考えた結果、自然の力強さと、その裏で人間がその力強さを壊している。そんな裏表、どちらも伝えていきたいと思った。

まだまだ先は長いから変わってしまうかもしれないが、当分はこれで行こうと思っている。



モザイク写真展
風景の詩
自由の森学園二階図書館前

2008.5.7～5.16



年間日程のこと

2008年1月、教員から生徒にむけて、来年度の「9月に割り当てられる行事を年間日程から外す」という提案が出されました。そして、そのことについて生徒にも話し合ってほしい、と。その理由として言われたのが、「①一年間を見渡して、行事の数が多すぎるためにそのつど授業が途切れてしまい、学びのリズムが生まれにくい。②前期終了まで実質的な授業数が大幅に削られ、学びのまとめへの流れがつくられにくい。」ということです。

しかし、1、2月とたくさんの行事が重なって忙しかったため、生徒は話し合いをもつことがあまり出来ませんでした。

そうこうしているうちに、2008年2月26日(火)、高校のクラスに教員から一枚のプリントが配られました。上記に加えて、「教職員会議ではそれらを解決していくための手だてとしてやはり、三大大行事(体育祭、学園祭、音楽祭)のうちの一つの行事をやらないようにする」以外ないのではないかと書かれていました。学年集会やクラス、9月の行事を考える会(生徒発足)などで生徒や教員が2008年4月の末まで話し合いを続けましたが、結論には至らず、三大大行事の日程が白紙になった2008年度年間日程表が教員によって出されました。



今、体育祭が5月24日(土)の本番にむけて動きだしていて、9月の行事日程について話し合う時間が生徒にはありません。しかし、このこと(学校についてのこと)は生徒も教員も保護者も、一人一人が考え、時間をかけて、みんなが協力して変えていかなくてはならないことなので、これからも話し合いの場をつくっていかねばいけないと思っています。

神座 想(高3)

学校を創れていますか？

～9月の行事日程から考えたこと～

9月に行事を入れないという事が教職員会議で決定された。つまり、学園祭がなくなるかもしれない。私は初めてそれを聞いたとき「なんで勝手に教員だけで決めてしまうんだ」と思った。生徒に相談もなしに勝手に…と教員を責めた。

でも9月の行事日程の話し合いに出たり、いろいろ考えたりしていく中で、その考え自体が教員任せだったのだと思うようになった。

“生徒主体性の学校” “なんでも一から生徒が創り上げる” そんな言葉をよく聞くけれど、今の自森は本当にそうなのだろうか。私達は自森を“創る”事ができているのだろうか。「9月の行事をなくす」という大事な事が教員側から提案、そして決定されたということは、生徒の力が弱まっているという事ではないかと私は思う。「教員が相談もなく勝手に決めてしまった」最初にそう思ったけれど、それは「相談も出来ない程、生徒に力がない」という事なのではないだろうか。去年の学園祭では係員が足りなくて教員が仕事をしていた係があったり…本来なら生徒がやるべきことも教員にやらせてしまう程、生徒に余裕がない。

また、教員と生徒で相談ができるような“場”もない。このまま日程の調整や今の自森への問題提議を教員に任せたままで「学校を創っている」と言えるのだろうか？私達は“おいしいところ取り”になっていないだろうか？私は、生徒も今の自森の問題などについて考えて、話して学校を創っていきたい。答えの見えない苦しい事もあるかもしれない。でもそこから学校を創っていきたい。そのために、生徒と教員が話し合える“場”が必要なのではないかと思う。そして教員にも生徒にも声をあげてほしい。

板垣 敬子（高1）

9月についてあれこれ

…このままだと、今年度の9月には行事ができない、つまり、おそらく学園祭ができなくなります。昨年度の1月ごろ、そんな話が教員たちから

一方的に決定されました。その背景には、自己評価表の記入期間に生徒が忙しくなりすぎるのと、行事が生徒を中心に自発的に作られていないんじゃないかっていう問題があったわけです。そのことについてはもうみんな大分知っているだろうって思います。でも、だからと言って、生徒が作りたいて言っている行事を教員達が一方的になくしてしまうのは？どうも自森らしくない動きだって思います。

教員達の提示している問題は確かに重要だとは思いますが、大事なのはそう言ったことを最初から生徒と話し合っって生徒達自身にその問題意識を作ることじゃないかって思います。その方が9月の行事を削って半強制的に生徒達の意識を学びの方向へ向けようとするよりも意味のあるものになると思います。



最近の教員の態度はどうも生徒達とは腹を割って話そうって雰囲気ではないように感じ取れます。僕の中では自森ってやっぱり生徒と教員の両方で形を作っていくものだっって思っています。だから、体育祭が一段落したら、話し合いの場を作ろうと思っています。生徒も教員も、その場で本音で話し合ってくれませんか??

早川 誠（高3）

教職員会議でよく考えたこと

すべての言葉は言い足りないか、それとも言い過ぎるかのどちらかだ。授業でもホームルームでも会議でも、大事なことになるほど、僕の語る言葉は陰翳に乏しくなったり、走りすぎたりすると思っている。それでも「話し言葉」は口ごもったり、言い直したりすることがその場で可能だけれど、「書き言葉」にそれを内在させることはとっても難しい。(もっとも、「日本語」の授業ではその難問に挑戦するのだけれど。)

「年間日程と行事について、考えていることを書いてほしい」と生徒から頼まれたときにも、実はその思いが最初にちらっと頭をよぎった。けれど、「書かない」ということも、こういう局面では一種の表現になってしまう。それよりは、たとえ過不足があっても、「書く」ということを選ぼうと思う。頼まれた瞬間そこまで考えたわけではないけれど、そういう思いが奥底にあったから、僕はずっと引き受けた。意見の違いを超えて、「根っこの思い」のところで、より多くの人と分かり合えたらと願っている。

「枠」を意識すること……これが、年間日程をめぐる議論のなかで、僕が努めて自分に持たせようとしている観点である。

私たちの生はいつも「枠」のなかにある。例えば人生は出生から寿命という時間の「枠」と共にある。けれど、このことを意識するのは難しい。僕は未だに自分の生に「終わり」があるという感覚をうまく持つことができない。別の事柄で、もう少し身近に引きつけてみよう。自由の森学園高校に入学した人は卒業するまで、「三年」という時間の「枠」を持つ。その意識は入学したばかりの時にはなかなか持てないものだが、卒業が近づくにつれて、リアルになってくると聞く。他にも、僕と生徒が一緒につくるものとして「日本語」の授業があるけれど、授業にも年間およそ四十回しかできないという「枠」がある。

授業のことで考えてみれば、年間四十回という「枠」を意識して、その「枠」をどのように生かせるかと、「授業の年間計画」を一応立てる。どのような順番で、どのように時間を配分したら、より充実した時間になるかな、と予想してみる。その上で一回「九十分」という「枠」をどう「つくれるか」ということが、僕にも生徒にも問われる。授業は「生きているもの」だから、予想通り運んでいかないし、むしろ予想を超えたところにおもしろさもある。けれど、「枠」を意識しているからこそ、すれすれのところで「枠」が持つ限界性に挑んでいくこともできるのである。



それはちょうど、相撲とりが土俵を意識しているからこそ、土俵際でのさまざまな劇（ドラマ）が生まれることに似ている。

例が長くなってしまったけれど、過去十数年「年間日程を考える」とき、この「枠」の意識を私自身が十分には持てていなかったと感じている。だから今回は自分に課している。

授業で深く学んだり、課題やレポートについて教師と話すこと・評価表で自分の学びと向き合うこと・一つひとつの行事を人間関係を紡ぎながらつくりあげること・進路や生き方について調べたり考えたりすること・他者や教師と学校のあり方について話し合うこと……全て大切でおもしろくなる可能性を秘めている。だからこそ一つひとつ丁寧にその「時間」をつくっていかねばならない。（それから何も「予定」のないぽっかりと空いた時間もとても必要だと思う。なぜなら「生きる」というのは良くも悪くも予定外のことが起きるということだし、自由の森の時間には尚更そういう「すきま」も大事だと思うからだ。）これらは相互に繋がっているから、同時並行的に行われることが多少はあってもいい。けれども余りにも多くのことが重なってしまえば、一人ひとりが自分自身と向き合う時間はとれないし、他者と対話する場もつukれない。例えば、評価表を書くためには自分自身と対話する静かな時間と空間が求められるだろうし、行事を丁寧に作りあげていくためには多くの人が自分をひらいて他者と対話する時間と場が必要になる。



授業のレポートや評価表を綴る時間に「行事をつくる」ことが重なったり、二つ・三つの行事や修学旅行が同時並行的に準備せざるを得ない日程が過去に出されてきた。一人ひとりがあわただしくなって気持ちの余裕を失いがちになったり、一つの行事やイベントについてじっくり考える場に人が集まらなくなったりすることは、「年間日程問題」とも繋がっていると僕は考える。生徒や教師の「気持ちや動機が大切なのだ」という意見にも納得できるころはあるけれど、一方で、みんなそれぞれの場で結構一生懸命やっているようにも感じている。さらに言えば、行事の準備などにあまり「乗り気でない」人とも一緒に何かの場をつくろうとすれば、「気持ちや動機」を生み出していくためにも、ゆったりとした対話の時間は、さらに必要になると思う。自由の森学園の生徒や教師が「なまけている」とは、僕にはあまり感じられないのだ。それよりも「構造的な問題」を強く感じる。構造的な問題を問うことは「パ

ンドラの箱」を開けてしまうようなことだったかもしれないけれど、教師という位置から見えることもあるし、向きあわなければいけないこともある。それを避けて通ることは自分自身の気持ちとしては、すでにできなくなっていた。

9月の学園祭の一日目、みんなが帰ってからしんとした校舎のなかを、有志の展示発表を見て回る時間が好きだ。昼間の慌ただしさのなかではとうてい見きれないから、夜に観て回っていた。展示されている多くの表現、それも「いま」しか表現され得ないような作品を観るにつけ、惰性に流されがちな僕は刺激を受けていた。展示発表を見て回る時間は、僕にとって貴重な時間だ。

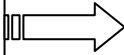


後夜祭のねぶたにも、僕にはとうてい考えつかないようなその発想の豊かさにいつも驚かされていた。例えば「9月に入っている年間行事をはずす」ということが、その学園祭の時間を無くすことに行き着きやすいということは、自覚している。けれどそのデメリットがあったとしても、現在の「込み入った年間日程」を少しでもゆとりのあるものにしたいという思いの方が、やや強かった。「ゆとり」とは楽をするためのものではない。評価表や授業にじっくりと取り組み、自分自身と対話し、そして一つひとつの行事も含めた日々の生活を充実したものにするための時間の創出である。そして何よりも、教師と生徒・生徒同士が学校生活や進路のことなどについて、落ち着いて話ができるための時間を創出するためのものである。だからもしかしたら、それを「すきま」と名付けるべきものかもしれない。その上で、これまで学園祭で行われていた「展示発表」の可能性を、「学園祭というかたち」ではなくても、どこかで生かすことはできないだろうかと探りたい気持ちもある。

職員会議の議論に参加し、決定に関わったときの自分自身のスタンスを振り返ってみた。だからここに書いたこと全てが、職員会議で共有されているということではないと思う。けれども、職員会議の議論の核心部分からはそれていかないように書いたつもりだ。

長くなってしまいました。最後まで読んでくれて、ほんとうにありがとうございました。

齋藤 知也（日本語科）



九条世界会議へ参加して

5月4日日曜日。9条世界会議の会場へ行きました。会場の入り口には、長蛇の列が延々とどこまでも続いていました。あとで聞いたはなしだけど、3000人の人が会場にはいれず帰ったそうです。

僕たちはちょうどぎりぎりセーフの最後尾！僕たちの、すぐ後ろからは入れませんでした。本当に危なかった・・・自由の森学園の保護者、教員のいろんな人がはいれなかったと言っていました。僕達は二階の最前列に腰掛けて見ました。いすじゃなくて、階段みたいなところに座っていました。ものすごい人の数でした。



第一部

「9条」というフレーズでこれだけの人が集まるなんて。第一部の司会、古今亭菊千代さんは涙がこぼれた、と言っていました。う～ん凄いよなあ、これだけの人が9条のために幕張メッセに集まるのか。吉岡達也という人が熱く開会の言葉を喋っていました。ピースボートの関係の人だとパンフレットには書いてありました。とにかく熱く、平和への一歩だと語ってくれました。アニファ・メズーイさんは都合のため来ていませんでした。

そして基調講演にうつりました。マグワイアさんと、ワイスさんがスピーチ！

マイレッド・コリガン・マグワイアさんは、北アイルランドの方。コーラ・ワイスさんはアメリカの方です。マグワイアさんの喋った内容の中では、日本の再軍備化への懸念、アメリカ政府の方針への反対。それとか、北アイルランドでの実践のこと等が印象に残りました。

ワイスさんは笑いを巻き起こす喋りでした。でも中身はいたって真面目。コスタリカの若者達が着るTシャツには、「空軍は鳥で充分、陸軍はアリで充分、海軍はサカナで充分」というのがあるそうです。「武器では、温暖化も、貧困も、病気も、無学も倒せない。武器で貧困は倒せない。むしろそういったものを増長させる」とも言っていました。そうだよなあ。

そのあとは池田香代子さんが喋りました。そういえば自由の森学園にきてくださったなあ、ずっと前に。その次に、弁護士会の土屋公献さんが喋りました。日本の矛盾点を突いていました。「9条がありながらそれでいてれっきとした軍隊がある・・・それなのに、9条を広めようなんておこがましいのではないか（会場笑う）けど、それでもやはり9条には大きな価値があるのだ」ということでした。

そして「ねがい」の合唱。そのあとはベートーベンの第九！30分以上やっていたなあ。東京の弁護士の方たちが練習したそうです！凄かったです。

第二部

最初、ピースボート・ダンスプロジェクトの人たちが踊りました。それに続いてエマニュエル・ボンバンデさんが喋りました。アフリカの方です。アフリカにこそ、9条の精神は必要なのだと語っていました。アフリカにも、9条に通じる武装解除の法律があると言っていました。

つぎは高橋竹山の演奏。歌と三味線を、あの広い会場に響かせるなんて凄い！あれだけの人を相手に1人で演奏するなんて、凄いパワーだと感じました。



お次はベアテ・シロタ・ゴードンが喋りました。日本国憲法の男女平等の条文をつくった人です。遠くからとはいえ、なまで声が聞けることができるなんて・・・凄く嬉しかったです。「日本の憲法はアメリカの憲法より素晴らしい」「アメリカが日本に憲法を押し付けたというけれども・・・自分のものよりいいものを人にあげるわけがないでしょう」と語っていました。



その次がナターシャ・グジーの演奏。パンドゥーラの音色も凄いけど、声が素晴らしい。きれい、というか透き通っているというか・・・ありきたりのことしか書けないけど、素晴らしかったです。

次は、李錫兌さんが喋りました。韓国で25年間、弁護士をやっているそうです。自由の森学園でも韓国の人たちと交流しているなあ、そういえば。次は、A I N U R E B E L S (アイヌ・ルブルズ) が踊り。コスタリカから来たカルロス・バルガスさんが喋りました。

コスタリカでは若者が国を相手にして裁判を起こしました。そしてコスタリカは、イラク戦争に賛同する国々から抜けたそうです。誰もが世界を動かせる、と彼は言っていたと思います。そのあと、普天間かおりが歌いました。これは普通のライブみたいな感じでした。

その次はトーク・セッション。5人の人が喋りました。アン・ライトと高遠菜穂子とカーシム・トゥルキとエイダン・デルガドと雨宮処凛が語りました。

アン・ライトはイラク戦争に反対して米軍を辞任した人です。高遠菜穂子さんはあのイラク人質事件のとき人質になった人。カーシム・トゥルキはイラク戦争のときイラクの兵士として戦った人。エイダン・デルガドはアメリカ軍のアブグレイブ刑務所での虐待を告発した人。雨宮処凛は日本の貧困問題についていろんな著作をだしている人です。まあ議論というよりは1人ひとりが語る感じでした。雨宮処凛さんには『生きさせろ！』コースでお世話になりました。記念写真撮ってもらった雨宮処凛さんが舞台にいるんだなあ・・・

そのあとは、亀渕友香と The Voices of Japan が歌いました。最後に、「きずな」という歌を合唱していました。湯川れい子が作詞した歌だそうです。こんど、あやや、松浦亜弥が歌うといっていました。スペシャルオリンピックス日本 冬季オフィシャル応援歌だそうです。良い歌だなあ、と思いました。これで第二部がおしまいです・・・



第三部

まずUAが歌いました。お腹に赤ちゃんがいたそうです。ものすごい迫力でした。次がファンキスト。会場を盛り上げまくっていました。そして歌も凄い。爆発するような部分と静かな部分が流れるように続いて素晴らしかったです。ヴォーカルとパーカッションの人は元自森生でした！

そのあと原田真二が歌いました。昔のアイドルだそうです。そして最後に加藤登紀子がいきました。ぼくたちは帰れなくなるので、その前に出てきてしまったのですが、あとで聞いたはなしによると素晴らしいフィナーレにふさわしい演奏だったそうです。聞きたかったなあ・・・

5月5日自由の森学園の展示

行く前までに何回か話し合いをしてどんな展示をするのか考えていきました。まず自由の森学園の人の思い・メッセージを届けよう、ということが決まりました。でもいきなりメッセージをください、といっても難しい。なので、何か1つの問いをだし、それに答えてもらうという形にしました。

その問いとは・・・

「平和についていま思うこと」

平和ってそもそもなんだろう・・・

いま自分は平和？

いま日本は平和？

いま世界は平和？



その問いにどう答えるのか、というのはとても難しいことです。でも、自由の森学園のいろんな人が書いてくれたおかげでメッセージはたくさん集まりました。

そういったメッセージとともに自由の森学園という学校では何をやっているのか、ということも展示することにしました。去年の中学修学旅行のまとめ『MANABI』、去年の中学3年生の後期森の時間でやってきた、わたしたちの未来「ヒロシマ・ナガサキ」チームのまとめ『ハナミズキ』。「生きさせろ！」チームのアルバム。積み重ねてきた学びの数々があります。それらを展示しない手はない、ということでそれらももっていくことにしました。

5月5日当日。いろんな人が通っていきました。池田香代子さんが来たときには少しびっくりしました。ぴゃんさんに宣伝下手といわれてしまった・・・ それもそのはず最初は宣伝ができていませんでした。そもそも何を知らせるべきなのか、という部分すら失念していました。というより何をすれば良いのかよく分かっていなかったのです。ぴゃんさんが喋ってくれたおかげで、人が止まるようになり・・・ そうか、まず自由の森学園という学校の説明が必要だ、ということに気が付き・・・ MANABIと、ヒロシマ・ナガサキと、生きさせろ！の説明をしました。

自由の森学園のパンフレットはなくなってしまいました。最初、菅間さんが持ってきたのが五部だけでした。そのあとぴゃんさんがもう少し持って来てくれたのだけど、両方ともなくなりました。

自由の森学園の卒業生に何人も会いました。どうしてだか道正さんが担任だったという人が2人もいたような気がします。あと自由の森学園の卒業生とパンクバンドやっていたという人もいたなあ。自由の森学園の保護者、元保護者だという人もいました。自由の森学園の卒業生といえば・・・「海外から見た憲法 9 条」でちえのお姉ちゃんが司会やってた！やるというのは前から聞いていたけど、やっぱり凄いなあ・・・もちろん展示を通る人は、自由の森学園を知らない人の方が大勢でした。でも同じような「空気」というか、雰囲気の人が多かったなあ。



通っていった人が書いてくれた感想は、何枚分も集まりました。その感想は「山の平和な毎日」というホームページに掲載する予定です。ぜひ読んでほしいなあ、と思います。



「自由の森学園という学校だからこそ、できる素晴らしいことだね」といろんな方から言われました。確かに九条世界会議にブースを出展していた高校・中学は自由の森学園だけでした。他の学校では憲法の話し合いに学校単位で参加する、ということがタブーになっている気がします。（まあそれなりにお金がかかるということもあるだろうし、めんどろなだけなのかも知れないけど。）

若い人は、もっと憲法にふれて、考えないといけないと思います。憲法は国の形を決めて、未来を左右してしまいます。憲法はまさに自分たちの問題です。ほおっておいたらあとで大変なことになるのは確実だ、とぼくは思っています。自分には関係ないとか思わずに、ぜひ憲法

のことを考えてみてほしいです。

中島 大地（高1）

憲法を守るだって？

いやいや守られているのは自分たち

むしろ活かす方法を考えよう

アーサー・ビナード講演



4月20日、秩父でアーサー・ビナードという人の講演がありました。アメリカ人の方です。日本語で詩（詩集『釣り上げては』）を書いて中原中也賞をとり、絵本（『ここが家だ：ベン・シャーンの第五福竜丸』）をかいて日本絵本賞をとり、エッセイ（『日本語ぼこりぼこり』）を書いて講談社エッセイ賞をとっています。しかも、ラジオのパーソナリティもつとめている言葉もちいる達人です。

どんなはなしになるのかよく知らないまま、講演に行きました。講演とはいっても堅苦しくなくて、ゆったりした感じでした。僕は、アーサー・ビナードさんの文章よりも語りのほうが、楽しいなあと思いました。文章では分からない細かなニュアンスまで伝わってくるからです。講演の内容は、とても面白かったです。

寓話や童話や昔の事件を見つつ、現在を見つめることで何かが見えてくる、と語っていました。比較の視点、といていた様な気がします。たとえば、トルコのホジャ（日本で言う一休さんみたいな人）という人の墓と日本の防衛は似ているそうです。

ホジャの墓の真正面は、鉄のゲート（扉）になっていてものすごく厳重な守りに見えるのですが。周囲にはべつにさくがあるわけでもなく、全く無防備なのです。それは、ガチガチに守りを固める人たちに対するホジャの風刺なんだそうです。それは、この日本という国にもあてはまります。日本は、戦車を揃え、イージス艦も揃え、はてはミサイル防衛システムなんてものまで作っていますが、食糧自給率というのを考えてみると、50%きっています。いくら武器をそろえても、食べ物がなければ生きていけません。日本はとても間抜けなことをやっているのです。

アーサー・ピナードさんは、いま日本が軍備を拡大するのは無意味だし、おかしいと語っていました。いろんな人が同じことを言っています。でもアーサー・ピナードさんの場合、祖国アメリカの悲惨な状況があるので、よりその言葉に強い思いがこめられているような気がしました。いまアメリカの国家予算は、どぼとぼ軍需産業へとつぎこまれていきます。そして教育・福祉などはそののこりかすを渡されているような状況なのです。日本も、そのような状況になったら大変です。

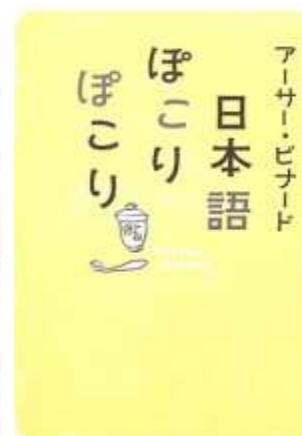
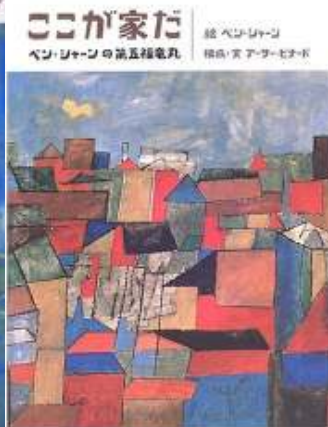
『9条は新品同様。手垢がまったくついていない。』とアーサー・ピナードさんは語っていました。確かにそうだなあ、と思います。日本の政府は今まで60年間、9条の精神を1度たりとも尊重せず、むしろ邪魔な足かせのようにあつかってきました。いまこそ、もう1度9条の精神を見つめ直すべきだといわれると、そうだよなあ、とうなずきたくなります。



(付け加え)

実はアーサー・ピナードさんは、九条世界会議の呼びかけ人の1人だということを九条世界会議のパンフレットを読み、知りました。意外なところで九条世界会議とも関係がありました。

中島 大地 (高1)



イラク派兵違憲判決の3つの意義

去る4月17日、名古屋高裁で「イラク派兵は違憲」との判決が出された。これは全国13のイラク派兵差し止め集団訴訟（原告は約6000人、弁護団は800人を超えるという）のひとつ。判決では、イラクでは武力紛争がおこなわれていると明言し、航空自衛隊による米兵などの輸送は、「他国による武力行使と一体化した行動」と指摘、「武力行使を禁止したイラク特別措置法、憲法9条に違反する」とした。つまり、ひとことで言えば、イラクは戦争（人殺しがおこなわれている）状態であり、その人殺しの手助けをする自衛隊の活動は、憲法9条に違反する、ということだ。これは当たり前といえば、まったく当たり前ののだが、それにしても大きな意義があり、歴史的・画期的判決である。



第一に、今までの政府の言い分が真っ向から否定、否認された、ということだ。政府は今まで、「自衛隊のイラク派遣は人道支援だ」「自衛隊の派遣先が非戦闘地域だ」などと言ってきた。「戦闘がおこなわれていない地域に人助けに行くのだ、どこが悪いのだ！憲法の理念に沿った活動だぞ！」と。この言い分が見事に打ち碎かれた。

第二に、憲法の「平和的生存権」について具体的権利がある、と言い切ったことだ。9条に違反する戦争への協力を強制されるような場合には、裁判所に救済を求めることができる、とした。平和を求める具体的権利が認められたのだ。

第三に、一、二を含め、自衛隊の活動について、正面から憲法判断をしたということだ。日本の裁判所は、自衛隊や米軍などの「軍隊」の問題については、＜高度な政治問題＞という訳のわからない言い草で、憲法判断しないことが通例になっている（これを「統治行為論」という）。さすがに、自衛隊や米軍を「合憲」とは言えない（この判断は過去1度もない）。しかし、「違憲」とも判断しないのである。つまり、判断から逃げ回っているのだ。その点でも、今回の判決は、1973年の長沼ナイキ訴訟以来の「違憲」判決であり、まさに歴史的判決なのである。



1960年代～70年代にかけては、「自衛隊は違憲か合憲か」という問題が国民の間や司法においての争点であった。しかし1990年代以降、自衛隊はフツーに海外に派兵／派遣されるようになった。しかし、この動きに対して、ずっとNO！を言い続けきた人たちがいるし、運動があった。つまり、「憲法を守らせろ」人々がいた。その積み重ねが今回の判決につながったのだ。

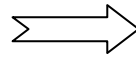
しかし、憲法を守るべき政府や自衛隊、与党政治家は、この判決を誠実には受け止めようとしていない。「裁判のためどうこうする考えはない（福田首相）」「あくまでイラク派遣は継続する（町村官房長官、石波防衛相）」「暇があったら読んでみる（高村外相）」「そんなの関係ねえ（田母神航空幕僚長）」と。それどころか、自衛隊をいつでも、どこでも、いつまでも海外に派兵し、米軍と一体となって行動できる「恒久派兵法」づくりに懸命になっている。イラク、アフガン派兵とともに注視（中止）すべき政府・与党の動きである。



人殺しに反対するのか、賛成するのか、はたまた無視・傍観するのか。憲法もさることながら、私たち一人ひとりの生き方や判断が問われている——そんなことを改めて考えさせる判決である。

菅間 正道（自由の森学園 社会科）

2部：ここに面白い世界がある。



建築家と数学

—僕の将来の夢は…建築家だっ—

建築家になりたかったきっかけ

小学校の頃から算数が好きで、先生からいろんな算数プリントをもらって、毎日計算ばかりやっていた。そのころは、頭の中は計算しか頭に入って無かった。

もっと算数のことを知りたくて学校の図書館の本を読んでいたら…家の設計図が書いてある数学の本を偶然見つけてしまい、僕はそれを読んでいると…凄く興味を引かれてしまった。僕が見つけたその本は、設計図を使って数学のことを説明していたけど…ぼくは、数学の説明よりも設計図のほうに目がいちゃって…だんだんいろんな設計図を見たくなくなってきて、つぎは建築家の本を読むようになって、いろんな建築を見るようになった。建物を建てる所の風景を見て考える建築家とか、今の気持ちをそのまま建物にこめて作る建築家とか…いっぱいいろんな建築家がいる僕もそんな建築家になりたいなあっておもった。

たとえば…安藤忠雄の建物は、この美術館図だと、その場所の森の風景とかを利用して建てたり、展示品を見やすいように建物を建てていて、すごいなあ…ってぼくは思った



自森の数学は…

僕は中一の6月に自由の森学園に転校してきた。そのときの担任は中野さんだった。数学科の中野さんの授業は最初のころは意味わからなかったけどやっていくうちにだんだん楽しくなってきてとてもわかりやすくて面白かった。僕では説明ができない難しい数学（√ルートとか）の説明を簡単にできちゃうなんて…すごいって思った僕は、高校で習う数学のプリント（微分とか）をもらったり、教科書をもらったり…中野さんの教えてくれる数学は高校の数学問題でも簡単に説明ができてあこがれの人。自森に入って初めて僕も数学の教師をやりたいなって思った。

教師もいいけどやっぱり…設計士になりたいって思って…そしたら設計士と教師の資格をとちゃおって思う僕だった。

押立 敏樹(中3)

マジックのマジック

マジックをやるようになったきっかけは、一昨年の学園祭で手品部の発表を見たからです。

そのときは、ボクは小六で目の前で見えるのが衝撃でした。目の前で見るとテレビのマジックよりすごく見えた覚えがあります。

特に印象に残ってるのは、しょうちゃん（今、中国に行って勉強とマジックの大会で活躍してる卒業生です。）のカップアンドボールです。カップの底をボールが通りぬけたり、カップの中からカップにボールが移動したり。を見て「すごい！」と思った。それと「すごい！」以外に「やりたい！」と思った。なので自森に入学したら、すぐ絶対手品部に入ろうと思ってました。



ボクはスライハンドマジックが大好きです。スライハンドマジックっていうのは、よく言われる仕掛けのあるものやあやしいものを使うではなく、普通のトランプやコインをテクニックだけで不思議なことをするマジックです。テクニックだけなので、練習がたくさ

んいるんだけど練習が楽しいので飽きずできます。

僕が好きなマジックは、お客さんに引いてもらったカードを混ぜてジャックのカードが探してくれるマジックと、コインの上にカードをかぶせて一箇所にコインが集まるマジックです。

一番楽しいと感じてるのは人によって違うと思うけど、ボクの場合は

「練習のしがいがある」というころ。今までできなかったマジックができるようになったり、練習すればするほど、不思議なことができるようになるからです。マジックっていうと普通の人には実感ないと思うけど、体育で一つの技ができるようになったみたいな感じによくにてる気がします。僕は飽きやすいのにマジックの練習は飽きずできて、毎日かかさず練習しています。



他には手品ライ部の発表のとき、みんなの前でやるあの緊張感です。だんだん慣れてきて大丈夫になってきて失敗もないんだけどまだやっぱり緊張して、あの後「終わった〜！」っていう達成感みたいなのが気持ちいいです。見て喜んでくれたり見てビックリしてくれるのが一番のやる理由です。

また今度、手品部の発表があると思います。マジックの不思議さと驚きを体験してください。その時にボクが感じた「すごい！」や「やりたい」と思ってくれるような人が出てくるとボクはうれしいです。



※手品部は水曜日一時四十分から和室で活動してるんでぜひ来てください。

中島 水樹（中2）

西表島（沖縄）の良い所



今回ヴォイスの記事でボクが選んだテーマ、西表という沖縄でも唯一アマゾン地帯のある島だ。1週間にわたって西表島の自然を体感しよう、と言う事で、この春休みにいってきました。始めの内は1週間長いとも思ったけど実際早かった。

沖縄生活1日目、東京から沖縄まで片道約六時間もかかった。でも飛行機から見た沖縄の海は最高輝くエメラルドグリーン。久しぶりに海を見て感動した。

沖縄着、飛行機から降りた瞬間感じた事は、『暑〜い』（長袖長ズボン）で来たから暑い、暑い。その日の沖縄の気温なんと28度。全く春とは思えない気温だ。しかし驚くのはまだ早い、これから繰り広げられるぼうけんは凄いぞ。

1日目は、ぼくらが泊まる西表の民宿（いるもて荘）に荷物を置き・・・そのあとそっこう海に行った。いるもて荘からは、5分ちよいで、ビーチに行ける。海パン一枚で海にダッシュ観光客に笑われた。「でも、そんなの関係ねえ〜」ビーチについたあ〜、海は太陽の光にあたってきれいに輝いている。サンゴは、美しく揺られ、熱帯魚と一緒に遊んでいた。1日目からこんな素晴らしい光景を目にした。



そんな調子でワイワイしていた。あっという間に時間が過ぎて行った。楽しくてしょうがない、次は何をして遊ぼうかと考えているうちに、1日が終わる。そんな感じに過ごしていた。

だいたい1週間のできごとを言うと、発見したいきもの、植物をまあ～簡単に紹介します。

・フルーツばかり食って身体がフルーツ（洋梨）のような形になった、面白い生き物だ。「ガザミ」、身体は普通の大きめのカニ、しかしはさみは身体の半分の おおきさ・これには驚いた。大人の指を一発で切る程の力がある。（沖縄によくいるハブ、それをひと切り、ハブは早いのに、簡単に捕まえてしまう程の優れた神経（驚き）

・他には、「タカ」「猛毒海へび」「日本一長いシダ植物」「マンブローブ」さまざまな出会いをして来た。

そして帰りの日。1週間は早いと、とても感じた。西表島の生活を大げさに言うと1ヶ月分体感したほど凄かった。今回の文には納まらない程西表はヤバイ。帰りたくないと思う程楽しかった。まだまだ出来事はあった。「わかりますか？」それほど西表島は凄いて事です。

ぜひ、何かで沖縄旅行に行くとしたら、まずは西表島へ。きっとあなたにも素敵旅の思い出が待っているかもしれません。



木又 楽（中2）

音。

SUM41 との出会い。

中二の夏あたりに携帯のサイトで適当にダウンロードしてみたのが SUM41 だった。

その時の事はあんまり覚えてないけど、いつの間にか毎日ずーっと聴いてるようになってた。今思うとなんなんだったんだろうって思う。(笑)
いつの間にか知ってた。

SUM41 の好きな曲 (最近) + これを書いた時の気分。

Slipping Away (声のかすれ具合が良い。)

Speak of the Devil (イントロから転調するあたりが好き。)

Mr. Amsterdam (スピード感が良い。)

Hooch (ギターソロがいい。)



Bullet For My Valentine (以下 BFMV) との出会い。

実は、SUM41 より先で、これも携帯で適当にとってみた中のひとつで、とった時(約2年前)は2、3回くらいしか聴かなかったんだけど、SUM41 ばかり聴いてて飽きてきたのか、最近では SUM41 は聴かなくて、BFMV ばかり聴いてるようになった。音楽の趣味も若干変わった気もする。というか、音楽の選択肢が増えたと思う。パンクとかは今でも好きだけど、メタル系のも聴くようになった。むしろそっち系ばかりかな。

BFMV と SUM41 の違い

ジャンルも違うけど、んー、なんて言えばいいんだろ・・・
当たり前だけど「音」が違うし、「伝えたい事」っていうのも違うと思う。

BFMV は Vo[?]みたいなのが入ってるんだけど、自分はそれはあんまり好きじゃない。曲自体あんまり好きじゃないのもあるんだけど・・・じゃあ何が好きなのかっていうのは、ギターの音というかメロディーとか「うまく言葉にできない部分」が自分に合ってる気がする。それか基本的にそんなに気にしてないのかも。



BFMV オススメ曲

Say Goodbye (Vo の声)

All These Things I Hate (Revolve Around Me) (動画で PV を見たら何となく分かってくる。)

The Poison (自分はギターの練習曲として聴く。)

Hand of Blood (自分はギターの音だけ聴く。Vo は微妙。)

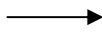
10 years today (ギターのハモリがきれい。全体がまとまっている。)

とりあえず自分が好きな曲をあげてみた。

ちょっと興味が湧いた人は youtube かなんかで聴いてみてください。

佐々木 優太 (高 1)

(Wikipedia からの抜粋)



Sum 41 (サム・フォーティーワン) は、[カナダ](#)出身の[パンク/メタルバンド](#)である。現在は 3 人で活動している。
"We're All To Blame" は映画『[ゴジラ FINAL WARS](#)』の挿入歌に使用され、話題を呼んだ。また『[スパイダーマン](#)』の挿入歌の "What We're All About" も歌っている。

ブレット・フォー・マイ・ヴァレンタイン (Bullet For My Valentine) は、イギリス出身の[ヘヴィメタルバンド](#)。BFMV と略される場合がある。[エモーショナル・ハードコア](#)と呼ばれる一連の若手バンドたちと同系列で扱われることが多い(彼等はこれに対し難色を示している)が、[アイアン・メイデン](#)や[メタリカ](#)といったメタルバンドからの影響を前面に出した独特な音楽性を持つ。

オニが「ぴゅろお」と叫ぶ

～『鴨川ホルモー』を読んで～

舞台は京都。京大の新入生の安倍は、貧しいので新歓コンパに片っ端から行って食費を浮かせていました。ある日、京大青竜会なるちょっと危なそうな名前を持つサークルのコンパへ。すると美しき美鼻を持つ乙女に出会ってしまい、そのまま入会してしまいます。いったい何のサークルなんだろう？ それも知らずになんとなくサークルに行っていました。そしてある日、『ホルモー』のことを知らされます。異形のものを使って戦うらしいが、いったい何なのかよく分からない。よく分からぬまま、『ホルモー』へと向かっていきます・・・

傑作です。なんてバカらしくて、楽しそうな毎日なんだろう。これを読んでいて少し京大に入りたくなってきました・・・ これはフィクションなんだけど、どこかリアルなんだよなあ。サークルか。いいなあ。もしかしたら、リアルかどうかということではなくて楽しそうなところがいいのかもなあ。自由の森学園でもこんなことができたらいいなあ、と思える楽しさみたいなものがあります。



もっと細かいところを突っ込んで書いて欲しい気もしたけれど、「吉田の諸葛孔明」凡ちゃんの智謀の冴えとか）とても面白かったです。と思ったら、『ホルモー六景』というのがありました。でも、そちらはう～んなんかもう1つ、という感じでした。やっぱり『鴨川ホルモー』が面白いです！ どうやら映画化されるらしい、というはなしを聞きましたが、映像が目には浮かんできません。「鹿男」も面白いし、万城目学って人は凄いなあ。「鹿男あをによし」も、「鴨川ホルモー」も、両方ともおすすめです。（『鹿男あをによし』は、ならの女学院が舞台の面白い物語です。TVドラマ化もされました。）

中島 大地（高1）

「放課後も食堂あいてるよ」

放課後、何もする事がない、けど家に帰るのもなんだかなーって時、私は「じゃあ、食堂でお茶でもするか」って。寒い、ちょっと息ぬき、誰かとお話したい、とりあえず暇、そんな時とかも食堂へ。高校に上がってからのこの1年をふりかえてみると、本当にたくさんの時間を私は食堂ですごしたなーと思う。それは、高校1年生の教室の場所が食堂に近いて言うのも大きいのかな。パッと行ってパッと帰ってこれるから、授業の合間の休み時間とかにも食堂に行ったし。そのせいか、教室に授業以外でいる時間が少なかったかも。私は、食堂でお茶しながら、話したりグデグデしたりする時間がけっこう気に入っていて、なんかいごちいいいなーって思う。じゃあなんで食堂でお茶するのはいごちいいんだろうって考えてみた。それは、いつでも汲んで飲めるあったかいお茶と、必ず人がいるってことかなって。あったかいお茶は会話と会話の「間」をうめてくれる。しゃべらない時間をいごちのいい空気にしてくれる。そして、食堂には常に人がいる。ひとけのない放課後の廊下や教室から食堂に来ると、なんだかホーッとされる。そこには絶対食堂のおばちゃん達がいて、お茶を飲んだり、何かしてる人達とかもいたりして。私が食堂に行くとホーッとするのは、いつ行ってもあるそう言う環境なんだなと思う。



こんな感じで私は食堂によくいきます。放課後とかのあいた時間に食堂に来てみるのもいいかもよ。

Ps. 私がこの文章を書き終えた時よりずいぶん暖かくなり、食堂に体をあために行く事はなくなってきました。この文章を『ヴォイス』に載せるにあたり、その許可をもらいに、食堂のおばちゃん（泥谷さん）に読んでもらいました。泥谷さんは「食堂は開けているんです。」と言っていました。「開いている」のではなく「開けている」居場所を作ってくれているのだなーと思いました。

小金澤 基（高2）

「なにしよう、なにできる。」

あれもほしい、これもほしい。季節がかわれば服もかわり、新曲が出てきたりしたと思ったら、CD プレイヤーや自転車が壊れていたりして。なぜか、何かしら「お金」が必要になってくる。それなのに、部活があったりするのに行事の企画が立ち上がったと思ったら、課題が山積みになっていたりして、もしかしたら、学生って忙しい。

求人誌とか見てみると、「新しい出会い！」とか「学生大歓迎！！」とか書いてあるけど、「学生」だからこそ、学校生活の時間が惜しいと思います。

お金は無いけど時間はある、お金はあるけど時間はない。そんなどうしようもないグルグルの中にいたら、いやでもやりくり上手になるのか、なにかを諦めるのか。あれもこれもなんて無理なのか、無理じゃないのか。

ただ、短期～長期に事務や接客、飲食店から派遣から、多種多様すぎるくらいの職場があつて。思いきって働いてみたら、あんがい自分に合っていて、頑張った分だけお金がもらえて。

そんなこと考えると…バイトやらないのも、もったいない気もしてきます。何かするためにアルバイトをするのか、何かするためにアルバイトしないのか。



学生だから楽しいし、できる事もしくはやりたい事、沢山あるかもしれないから。

留まる 踏み出す 何かするのは自分次第。

なにか楽しんだり、なにかできる自分が見つかる。新しい場所。ふれてみるのも、わるくないかもしれません。

深沢 周（高3）

“他者と交わる”

今回は私の働いている居食屋和民を通して感じた“出会い”の大切さについて少し話させていただきます。居食屋とは全く面白い所で、たくさんの人たちが様々な思いをもってやってきます。ご飯は家で食べる習慣を持つ日本人がわざわざ外へ食べに来るにはまだそれなりの理由が必要で、そんな少し特別な雰囲気を持った人たちを観ていると、いろいろな発見がございます。

ある時、2人組のサラリーマンにおかわりはいかがですかと尋ねますと、若い方の男性はまだ半分しか減っていない自分のグラスをチラッと見てから「いや結構です」と呟きました。お酒が苦手な人なんだと察しがついたので引き下がろうと思っていますと、もう1人の上司らしき人が「もう一杯だ」と黒みがかったリングのような顔で言ったので、若い人は仕方なさそうに作り笑いを浮かべ「もう一杯ずつ下さい」と頭を下げた。サラリーマン（だけではもちろんないが）の上下関係は凄まじいものですが、こうやって今上司の機嫌をとるため頑張ってお酌している若い人たちが将来同じように人の上に立つのだろうかと思うと少し怖い気持ちになったりもします。

先程も触れましたが、居食屋にはたくさんの人たちが集まります。若い人たちが合コンしたり、熟年の男女が離婚の話で揉めていたり、おじさんが若い女の人を口説いていたり、一人ぼーっとカウンターで酒を飲んでいたりと様々です。時には赤ん坊を連れてくる家族もあって、タバコがあるのにつれてくるなと思いますが、うるさい居酒屋ですやすや眠る赤ん坊を見るとなんとも心が安らぎます。ある休日の夜、おばさんに「ちょっとお兄さん、日本酒3年前に頼んだんだけど」と、指を3本たて強い口調でにらまれました。実際には3分程度で、何だこの婆あと思いますが、後から考えたら、自分にとってはたったの3分でもあの人にとっては大切な3分だったのかもしれないと思いなおしました。

一期一会といいますが、知らない人と会うことは大切なものです。その人に“出会う”ということは一生に一度しか出来ません。同じ出会いは2つとなく、場所も時間もお互いの気持ちも違います。ありとあらゆる出会いの場がこの世にはございますが、一つ一つの出会いをもっと楽しんでみてはいかがでしょうか。

神座 想（高3）

どうして「ヴォイス」を発行するのか

このごろ、自由の森学園が、たくさんの「観客」と、一部の「舞台に立つ人」に二分されている気がします。これはあまり、いいことではないと思います。いろんな人の声が表に出てこない、自由の森学園全体がだんだんと同じ色に染まっていってしまって、「多様性」や、「個性」といったものが見えなくなってしまいます。

そこで、批評紙・意見紙として『ヴォイス』を作ることになりました。

まず、ある物事をとらえるとき、生徒の視点を大切にします。大人の理屈や視点も、もちろんあるかと思いますが、まずは自分達自身のベースに戻って考えていこう、というわけです。どんなに立派な事を書こうと、まだ半人前、できないこともあります。でももしかしたら、まったく新しい視点が、ポッと生まれてくるかも知れません。そういったことを意識していけたらいいな、と思います。

それともう一つ、自由の森学園はあとの人たちに受け継ぐことがあまり上手ではない、と私たちは感じています。1回1回、いいものが出来ても、そこで終わってしまう、途切れてしまっています。しっかりと積み重ねて、つなげることで見えてくるものがあるはずなのに、それではもったいない。

『ヴォイス』とは言葉どおり、声のことです。鋭い指摘を取り上げ、小さなつぶやきも拾い上げ、その「器」として、声の発信源となっていきたいなあ、と思います。

編集 一同

Special thanks to all the Guests



Cham Cat

ヴォイス編集部

〒357-8550 埼玉県飯能市小岩井 613 自由の森学園図書館 出版相談室（大江）

Fax 042-972-6661 e-mail jibO@jyunomori.ac.jp

編集：佐々木優太・中島大地（高1）板垣奏男 小金沢 基（高2）神座 想・深沢 周（高3）

（表紙：佐々木優太）